かも市史だより

平成22年3月
No.21

◆編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

■石田友蔵・友吉の肖像■

石田友吉像

▲石田家の肖像画と五姓田芳柳の落款・印章

▲印の写真は、明治十九年（一八八六）八月、来県中の画家五姓田芳柳が描いた、上条村（現加茂市）の地主石田家の二代目当主友蔵（中央上段）、その息子友吉（下段左側）ほか一人の肖像画である。

石田家は、江戸時代終わり頃に七谷の高柳村から上条村に居を移し、急速に土地を集積したという。明治三十四年（一九〇一）には田を中心に一七一町歩の土地を所有、当時の加茂町では、本町（現第四銀行加茂支店の地）に居を構えていた市川家に次ぐ大地主であった。特産品加茂縞の染色業も営み、明治三十年には加茂貯蓄銀行（のちの加茂銀行）を設立している。肖像画を依頼した時の当主友蔵が、大正三年（一九一四）に若宮町の双璧寺に寄進した「伝元三大師」木像は、平成二十年に新潟県文化財に指定されている。

この絵を描いた五姓田芳柳は狩野派から出発し、のちに西洋画の手法を学んで独特の日本画を描いたことで知られ、明治七年には、宮内庁の依頼で明治天皇の肖像画を描いている。この高名な画家を自宅に滞在させて、肖像画をかかせた石田家の資力の程が窺われる。

（近現代部会　溝口敏麿）

特別寄稿

戦国加茂の殿様と神様

天地人のころ

立教大学名誉教授　藤木久志

剛勇をうたわれた上杉謙信が急死すると、越後の国中には、たちまち跡目争いの内乱が広がりました。その戦争を上杉景勝が勝ち抜いて国を治め、直江兼続がさっそうと登場してくることは、テレビ「天地人」ですっかり有名になりましたね。そのころ、いったい加茂の殿様や神様は、どうなっていたのでしょうか。『加茂市史』資料編（中世、金子達編）をたよりに、少し探ってみましょう。

加茂山の城と新しい殿様

その内乱（お館の乱）で、加茂は反景勝方についたらしく、加茂山の城は景勝方に攻撃されました。そして、城が姿を現すのはこのときだけで、姿を消してしまいます。

新しく加茂の殿様（「加茂在番」）になったのは、本荘豊後守顕長でした。彼は土着の領主ではなく、今は村上市にあたる、小泉庄を治めて、剛腕で知られた本荘繁長の惣領（長男）でした。長男もまた、父親とは別に、約二千三百石もの大きな領地を、上杉景勝からもらっていました（以下、地元の通辞に従って、本庄と略記します）。

しかも、越後の名門武士だけを集めた「越後侍中」というグループの中で、この本庄顕長は、第二位（ナンバー2）という、じつに高い地位を占めていたのです。顕長のこうした高い身分は、父親の七光りと、大名一族の名門だった「長尾小四郎の跡」を与えられたからだ、とみられています（阿部洋輔氏のご教示によります）。

顕長の「顕」の一字は、もと顕景といった大名景勝の名をもらったものですし、「長」の一字は父の繁長から受け継いでいます。つまり、彼は景勝から、大名長尾一族並みの、特別待遇をうけていたことになります。

▶文禄四年賀茂村検地帳　右の見開き頁記載の一二筆中、「同分」とみえるもの含めて一〇筆が本庄分

加茂の地が、中越の要として、どれほど重視されていたかが、これでよくわかります。しかも、この「加茂在番」の実情については、関正平さんに、詳しい分析があります（『加茂郷土誌』五、一九八三年）。加茂村に、新しい殿様・本荘顕長の家来たち六人（太田・高野・高橋・根岸・水橋・寺島）が、それぞれ家来を率いて、「代官さま」として、乗り込

▶ 剣ヶ峰城跡（①）と尾振山城跡（②）、要害山城跡（③）の遠望

んできたのです。一五九五年（文禄四）に豊臣秀吉の奉行が作った土地台帳（「賀茂村検地帳」）によりますと、殿様（代官たち）の支配の威勢のすごさが、まざまざと分かります。

その台帳に登録された、加茂の全耕地のおよそ三〇パーセント・約二一町歩（一五一筆・七〇人）ほどの地権者が、殿様の本庄氏でした。残りは明神分・宮分・山王分・大宮分・寺分・社領と、社寺が目立ちますが、これらを併せても全体の一八パーセント余り・一三町歩弱（八八筆・五八人）にしかならないのです。

つまり、加茂の耕地の三割を、新しい殿様の「本庄分」として、差し押さえられてしまったわけです。これが、明神さまの時代から、本庄氏の時代へ、「天地人の時代」への、大きな変化の内情でした。

ところが、この殿様の加茂支配も、長くは続かなかったのです。この検地のわずか二年後、一五九七年（慶長二）に、上杉家中が京都伏見城（秀吉の居城）の普請に動員されていたさなかのことでした。なにか「不始末」があったという、じつにあいまいな理由で、齋藤・加地・柿崎（以上、越後土着の名門）や、高梨・須田（以上、信濃出身の名門）とともに、「お叱り」をうけて、そろって失脚してしまったのです。景勝と兼続が謀って仕組んだ、目障りな「名門」潰しだったに違いないと、阿部さんは推測しています。それだけ、景勝と直江兼続の権勢が強くなった

▲ **要害山城跡** 加茂南小学校からみた遠望（上）と二の丸曲輪

▶ **老杉の林となっている曲輪** 人びとがここへ避難したわけで、「天地人」ドラマのカゲの部分が、加茂の側から、くっきりと見えてきます。

城をもつ明神さま

ところで、話を中世の加茂山にもどしましょう。

市民体育館の裏手に当たる、加茂山の稜線にそって、加茂（耕泰寺）根古屋のすぐ上に、要害山城があり、その奥に剣ヶ峰城・尾振山城と、合わせて三つの城が並んでいて、『かも市史だより』（一二号、二〇〇五年）に、鳴海忠夫さんによる城図の紹介があります。

鳴海さんは、加茂の殿様の代官たちは、ふだんは加茂（耕泰寺）根古屋に住み、いざというとき、近くの

加茂川
加茂町
市民体育館
青海神社
池
池
上賀茂
下賀茂
大昌寺
金剛谷
加茂山公園
諏訪社
（モミジ谷）
椿谷
神苑
耕泰寺
尾振山城砦
（城山）
剣ケ峰城
要害山城

山上にある要害山城に籠もった、と推定しています。その要害山城に上ってみますと、要害山は狭いのですが、そのすぐ近くに、少し大きい平場があって、ここならいざというとき、守備兵たちが籠もることもできそうです（写真参照）。

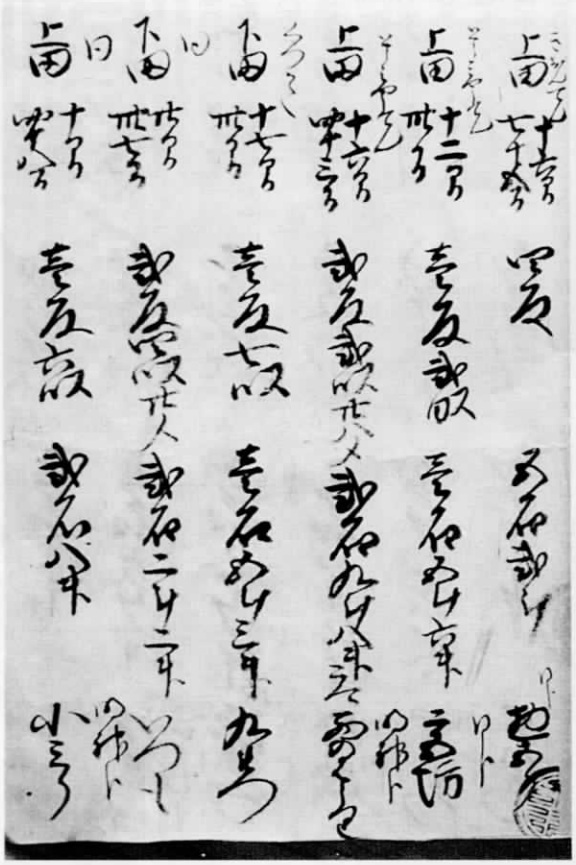
これら三つの城は、いったい誰が、いつ造ったか。文献も言い伝えもありません。そこで、市役所にある近代の土地登記簿で、これら三つの城の持主を調べていただきました。すると、代官たちがいたとみられる要害山城の所有者は、転々と変わっています。ところが、剣ヶ峰と尾振山城の二つは、ともに一貫して青海神社の所有になっていました。

神社添いの町々の住民は、戦争や大洪水などのとき、どうしたか。私は関さんのご案内で、青海神社から、市民体育館や加茂山公園の一帯を歩いてみました。先に見た三つの城と神社の裏山の間には、神社に向かって左側（加茂根古屋側）のモミジ（金剛）谷と、右手は大昌寺大門側から山手に向かって椿谷という、二つの深いV字谷が、いまも入り込み、加茂山公園の見晴台の奥で交差する形になっています。

神社裏手の公園の一帯もまた、天然の要害の地形を備えているのを見て取ることができるのです。ここに私は、中世の時代、いかにも加茂の領主にふさわしい、明神さんの面影を読み取ってみたい、と思うのです。

▶ **池の周りの切岸** 神池の周りが曲輪の切岸となっている

「文禄四年 賀茂村検地帳」より「きおんてん」 ▼



きおんてん 上田	十六間 七十五間	四反	五石弐斗	同分 惣五郎
とうミやうでん 上田	十二間 卅間	壱反弐畝	壱石五斗六升	同分 宮坊
とうミやうでん 上田	十六間 四十三間	弐反弐畝廿八歩	弐石九斗八升二合	明神分 西のはうり
くつかた 下田	十七間 卅間	壱石七畝	壱石五斗三升	九衛門
同 下田	廿間 卅七間	弐反四畝廿歩	壱石二斗二升	いつも
同 上田	十間 四十八間	壱反六畝	弐石八升	明神分 小三郎

市神さまの行方

ところで、本誌一八号（二〇〇八年）に、私は「市の立つ日」という「四・九の市」（六齋市）の思い出を寄せました。市神さまといえば、どこでも多くは祇園さんです。京都の祇園祭りは、ことに有名です。そこで私は、加茂の「祇園さん」探しを始めました。しかし、それらしい独立の神社や青海神社に合祀されている神々のなかにも、祇園さん（牛頭天王・スサノオノミコト）は見付かりませんでした。

ほとんど私があきらめかけた頃、関さんから快報が届いたのです。

先にみた、あの文禄四年の「賀茂村検地帳」のなかに、明神さん（青海神社）の所有する、一筆の「ぎおんでん（祇園田）」が、「上田」（最上級の田地）として、四反歩（一六間×七五間、五石二斗）も登録されている、というのでした。私の予感は的中したようです。

しかし、この検地帳が作られた十六世紀末のころには、その祇園田の持ち主は「明神分」とありますから、もう明神さんにのみ込まれてしまっていたことになります。

「祇園田」の痕跡は、中世のいつ頃か、加茂の町にも「祇園さん」の夏祭りがあった、らしい、と語りかけているのです。歴史のナゾ解きも、興味は尽きません。

女義太夫語りのファンたち

昭和六年（一九三一）十月二十二日の「新潟新聞」に、女義太夫語り豊竹昇之助の一座が加茂に興行に来るという記事が載った。義太夫節とは浄瑠璃節ともいい、人形浄瑠璃の三味線と語りを担当するが、人形無しの素浄瑠璃、三味線の弾き語り、歌舞伎のチョボ語りも演ずる。義太夫節は十七世紀に、大阪で竹本義太夫が創始し、十八世紀に竹本座と豊竹座が競い、質的に充実して全盛時代を築いた。竹本播磨小掾・豊竹越前小掾をはじめ、多くの名人が輩出して、現在もなお舞台生命を保つ「菅原伝授手習鑑」、「仮名手本忠臣蔵」などの名作を続々と発表、義太夫節の芸を完成させた（『国史大辞典』）。

今日でも、人形浄瑠璃の伝統芸能としての良さは広く知られているが、戦前までは大都市で、落語、講談、浪花節、奇術、曲芸などとともに、義太夫節も寄席で楽しむ大衆娯楽の中心であった。加茂町では昭和初期、加茂座と葵館という劇場があり、地方巡業の演芸を楽しみ、そこに活動写真も登場した。この記事では、豊竹昇之助という義太夫語りが来ることで加茂町民の熱気が高まり、三味線の芸を心得る芸者衆は総出で出迎え、一般町民の雑踏も予想されとあるが、こうした人気の背景は何だろうか。新聞や雑誌の広告で、挿絵・写真も盛んに使われるようになった時代だから東京辺りでの評判も知られ、多くのファンがいた。すでに始まっていたラジオ放送や、レコードで聴いていてその美声に惹かれていた、などと考えると、大正、昭和初期の新しい時代相が見えるようである。

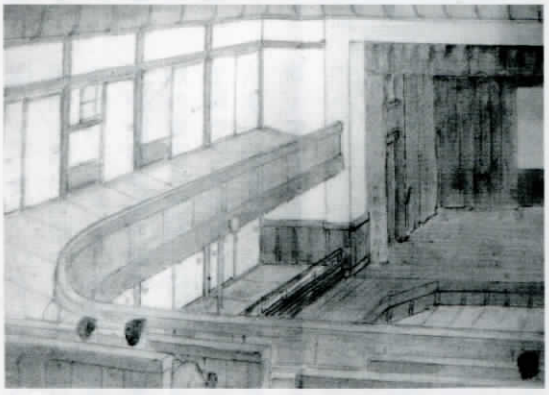
ただ、歴史的には、東京で女義太夫が熱狂的に大衆を惹きつけたのは明治三十年前後で、当時は少女義太夫が続々と登場していた。豊竹昇之助も明治三十四年（一九〇一）当時、一二歳の語り手として有名になっていた。学習院高等科在学中の志賀直哉は昇之助の熱狂的なファンだったようだ（『志賀直哉日記』）。夏目漱石は小説『三四郎』の中で、熊本から上京してきた学生の三四郎が昇之助の話を聞いて「三四郎は何だか寄席へ行って昇之助を見度くなった」という場面を書いている。ここに見られる昇之助は、昭和に入っても人気を保ち、加茂の記事にある昇之助もまさしくそれであろう。だとすれば、人気絶頂期の芸能人が加茂に来たと考えてよいだろう。歳を数えると四二歳ということになるが。

（近現代部会　大塚　哲）

加茂町の昇之助一座

本社加茂支局木戸新聞店後援にて二十二日加茂座に開演する我國女義界の名題豊竹昇之助一座の前人氣は低然ふつ騰し加茂藝妓組合は特に藝術奨勵と慰安の目的から約八十名の藝妓全部の團体申込ある外前賣券も各階級に歡迎され賣れ行き頗好である、當日一行が乘込みの際は加茂藝妓連一同は加茂驛に出迎へをなし主催側は到着と同時に歡迎煙火を打揚るなど花々しき乘込で加茂驛頭は雑踏を呈するであらう、殊に木戸新聞店では本紙讀者に特別割引優待券を呈上するので非常の人氣である

▲ 昇之助一座の加茂来訪を伝える「新潟新聞」記事



▲ **加茂劇場の外観と内装**　昭和10年の穀町大火で加茂座が焼亡したのち、町民へ娯楽を提供する場となった（2枚とも本間正氏画）

（右）昇之助　（左）昇菊
報知新聞この日の挿絵

▲ **豊竹昇之助と豊竹昇菊**（明治34年9月22日付「報知新聞」）